

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ウと生きる、ウが生きる：中国の鵜飼い漁撈民

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 卯田, 宗平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008370

ウと生きる、ウが生きる — 中国の鵜飼い漁撈民 —

日本学術振興会特別研究員(東京大学・人類生態学教室) 卯田宗平



「鵜呑みしろ」と漁師に怒られるものがある。

ウ本人(鳥)である。ウは、水中で魚を見つけると嘴を使って魚をはさみ、水上に浮び上がる。そして、くわえた

魚を嘴で回転させ、頭から丸呑みする。その際、ウが魚をくわえ続けると魚の表面に傷がつく。

日本では、ウの嘴によって傷のついたアユを「歯形のアユ」や「ウアユ」と呼び、高価なものとされている。一方、中国では、傷のついたコイやフナ、ナマズに価値があるどころか「傷があるから安くしろ」と農民に言われる始末である。そのため漁師は、せつせと魚を獲るウに対し、魚をすぐに呑み込むように指示するのである。

ウを使って魚を獲る行為は、日本と中国、そしてヨーロッパで行なわれている。日本の鵜飼いは、現在ではおもに観光を目的に行われており、ヨーロッパのそれは鷹狩りと同様に一種のスポーツとして認識されている。一方、中国の鵜飼いは、ほとんどが生業として続けられている。その漁法は、個人漁や集団漁(写真1)であったり、竹船や双胴船(写真2)を利用したり、刺し網を併用したりと地域によって相違がみられる。

中国の鵜飼いはさまざまであるが、各地で共通している点もある。それは、どの漁師もウをよく観察し、根気よく愛情をもって飼い馴らしていることである。たとえば中国江西省ポーヤン湖の漁撈民は、朝起きるとまずウに水を与え、体調

が悪いウを漁に出さず、操業中に調子が出ないウを船に戻したりもする。また漁師たちは、若いウを飼い馴らすために、操業中にあちこち逃げる若いウを追いかけ捕まえる作業を約3ヶ月間、何度も繰り返す。

こうした漁師たちが今、口癖のようという言葉がある。それは、「ウがよく病気になるようになった」である。主な原因は、水質の変化であるという。ウは、魚食性の水鳥であり、食物連鎖の上位に位置する。それゆえウは、特定の物質が蓄積し、その濃度が増す生物濃縮の危険に見舞われる可能性も高い。つまり、魚を鵜呑みするウは、水質変化の影響を強く受けるのである。

高度経済成長期、日本では残留毒性の強い農薬が使用され、それに呼応するかのようニコノトリやトキを失

い、カワウの営巣数も減少した。一方、中国では、現在、いたるところで水環境問題が顕在化している。ウの体調を気にする漁師の言葉もあちこちで聞く。こうした中国で今、水鳥にやさしい環境をいちばん願っているのは、ウと生きる漁師なのかもしれない。なぜなら、その環境でウが生きるからである。



写真1: 集団漁では、15～20人の漁師が魚をおこなう(中国江西省)



写真2: 持ち運びに便利な双胴船。バイクなどに乗せて移動する(中国湖北省)